新春特集

わがまち「竜王」を輝かせる人々

～平成25年度　竜王町「交竜の郷あえんぼ賞」受賞者の皆さん～

平成25年度の「交竜の郷あえんぼ賞」は、皆さんに推薦いただいた中から選考の結果、7者の個人・グループが受賞され、昨年11月3日、「第36回竜王町文化祭」で表彰者の紹介が行われました。

竜王町は、私たちの周りで、広く地域を支える奉仕活動や社会に貢献する活動、人知れず地道で心温まる活動、他の模範となるような善行活動などを行っているこれらの人・グループに深く感謝し、町民皆さんの心豊かな住みよいまちづくりへの参加が広がることを目指します。

※受賞者のご紹介は順不同です。

西山

堀井（ほりい） 嘉男（よしお）さん

幼稚園児（5歳児）の自然体験の一環として自らのブドウ農園を開放。収穫体験とともに、ブドウの育て方のお話をされるなど、子どもたちに学びの場を提供。

町内でブドウ農園を営む堀井さんは、「他府県からブドウ狩りに来るお客さんは多いけど、町内の子どもがブドウ狩りに来ることは少ないなぁ」と思われたことをきっかけに、平成17年から毎年、幼稚園児たちにブドウ狩り体験の場として農園を開放し、地元の子どもたちにも竜王町のブドウのおいしさを伝えておられます。

「ブドウの実には種があるんやぞと、子どもたちに種のあるブドウを持ってくると、『ほんまや～』と驚かれたわ」と体験中の様子を楽しそうに話される堀井さん。体験では、子どもたちにブドウが大きくなるまでのお話や世話の仕方のお話もされているそうで、子どもたちの「食」への興味や学びにもつながっています。

「ブドウ狩りをやっている子どもたちは本当にかわいい。ついつい時間が過ぎるのも忘れて、先生が帰ろうと言わはるまでブドウ狩りをやってしまいます」と目を細められる堀井さん。何よりも、丹精込めて作られたブドウを「おいしい！」と言って子どもたちに食べてもらえると喜びもひとしおだそう。

「これからも命ある限り、続けていきたいです」と語られる堀井さんのブドウの味は、子どもたちにとって生涯忘れられない「竜王の味」になるのかもしれません。

こうした体験は大人になっても忘れられない思い出になるはず

松陽台

松陽台ミラーズ さん

区内のソフトボール愛好者クラブとして活動する一方で、区民納涼祭をはじめとする自治会活動の裏方で強力なサポーターとして長年活動。

メンバーの家族もおそろいでアットホームな雰囲気のクラブの集まり

「松陽台は振興住宅地なので、隣の人の顔も分からない。だから仲間を集めて親睦を深めよう」と、今から28年前にソフトボール好きの区民で結成されたソフトボールクラブ「松陽台ミラーズ」。クラブ結成から29年目を迎え、その活動はグラウンドにとどまらず、地区全体へと広げられています。

毎週日曜日の練習や公式戦への出場などの活動とともに、地区の納涼祭の事前準備や後始末の手伝い、防災訓練時の車両の誘導など、主に自治会活動の裏方で幅広く活躍されています。

「自治会も高齢化が進んで大変だろうなと思い、元気にソフトボールをやっている私たちが少しでもお役に立てればなと、お手伝いしていただけなんです」と受賞の知らせに恐縮した様子で語られるのは、現在、30歳代から70歳代までの18人のメンバーを率いる代表の苗村正秋さん。

「自治会活動の応援を始めて20年ほどになりますが、メンバーの中には、親子で参加している人もいます」と話されているとおり、自治会の行事に参加しながら勧誘も同時に行っておられることが功を奏して、今やメンバーも多世代にわたる構成となりました。

自治会の強力なサポーターとして、楽しみながら活躍されるメンバー皆さんの取り組みは、区民からの感謝と期待の声も大きく、地区に活力を生み出す大きな力となっています。

西山

小西 和代 さん

西山区内にある防火水槽の周辺の土地を45年にわたり、花を植えるなど手入れを続け、環境美化に貢献。

「健康でいられたから続けてこられた」と小西さん

「知らない間にそんなに月日が経っていました」と話されるのは、西山地区の防火水槽用地周辺の清掃や花の植栽を実に45年にわたり続けておられる小西さん。

「花といってもコスモスやマーガレットとか自然に生えるものが植わっている程度で、それも家の近くだったので、やることが当たり前のことになっていました」と話される小西さんの活動は、お姑さんが行っていたことを引き継がれたのが始まりだそうで、「私が賞をもらっていいのでしょうか…」と終始恐縮されたご様子。「この頃は、夫も手伝ってくれるんです」と、夫の久弥太さんの理解と協力も活動の支えになっていると話されます。

「大通りのそばなので、お祭りやお墓参りの時期は特に気に掛けています」と、まるで、ご自分の役割のように話される小西さんが、家事の合間、農作業の合間にも、草を刈ったり花の種をまいたりしていると、地区の皆さんから「あんたがやってくれてたんか」、「いつも、ありがとう」と声が掛かることもあるそうで、活動を通じての地区の皆さんとのふれあいも楽しみにされています。

「これからも『まちのために』の気持ちで、がんばって続けていきます」と笑顔で話される小西さん。防火水槽用地周辺を彩る四季折々の花の傍らに、日常的に小西さんの姿がある、そんな心優しい風景が西山地区の誇りとなっています。

岡屋

久野（くの） 敏夫（としお） さん

長年にわたり町の姉妹都市である米国ミシガン州スーセー・マリー市との懸け橋役として貢献。近年は、「子ども英語スピーチ大会」の審査員としても活躍される。

交流事業では通訳としての役も担われる

中学生の国際交流事業が始まった平成5年から、竜王町の姉妹都市である米国スーセー・マリー市との派遣・受入の交渉や通訳などで両市町の友好・親善の懸け橋となって長年活躍されてきた久野さん。現在は、町内の国際交流ボランティア団体「ピープル・アンド・ピープル（P&P）国際親善クラブ」の代表として一般の団員を募っての派遣を主催されるなど、地域の国際理解を深める活動に取り組まれ、また、町の「子ども英語スピーチ大会」では審査員を務め、子どもたちの英語教育の支援もされています。

久野さんは、「これまで使節団の団長や通訳として数回行っています。初めて市を訪れたとき、おおらかなスーセー・マリー市の皆さんに親しみを感じまして、市の使節団が来られたときは、必ずわが家でも受け入れをしているんです」と、ご自身もホストファミリーとなって、家族ぐるみで国際交流を続けておられます。そして、「子どもたちには、英語に興味を持ってもらえる良いきっかけになります。必ず役立つ経験になる」と言葉に力を込められます。

「平成26年には姉妹都市提携が40周年を迎えます。P&Pのメンバーやホストファミリーを引き受けてくだる方の尽力もあり、さらに交流は深まると思います」と、両市町のこれからの交流に期待を込められるのは、まちを、ひとをつないできた久野さんだからこその熱い願いでもあります。

西横関

澤田（さわだ） 二三男（ふみお） さん

西横関区内を流れる大洞川沿いの雑木を伐採し、アジサイを植栽するなど手入れを継続。また学童集合場所に花壇を作るなどして環境美化活動に貢献。

❶澤田さん「ごみが捨てられることもなくなり非常にうれしい」と話されるとおり、いつも見通しの良い大洞川

❷パンジーが植えられた花壇

周辺地域の農業用水にも使われている区内を流れる大洞（だいどう）川。20年前、竜王町へ越してきた澤田さんが目にしたのは、ごみがあちこちに捨てられ、人の背より高い草や木・竹が生い茂る、あまりにもひどい大洞川沿いの様子でした。

「これはいかん、自分の住む場所は自分できれいにしたい」との強い信念のもと、雑木などの伐採やごみ拾いなどを続けてこられた澤田さん。今や、ごみも捨てられることはなくなり、見通しも良く、手入れされた花の咲く川沿いへと生まれ変わりました。

「当たり前のことを当たり前に続けてきただけです」と20年におよぶ活動を事もなげに振り返られる澤田さん。今では活動に加わる仲間も一人が二人、二人が三人…と増え、「それも、良いんちゃうかな」と、照れ笑いされながらも、うれしさを感じておられる様子。

最近では、川沿いに毎年20本ほどのアジサイを植樹され、見ごろの6月には区民の心を癒します。さらに、「子どもが集合する場所にちょっとでも、お花があれば良いのでは…」と学童の集合場所に花壇を手作りされており、活動の範囲も広げられています。

「育てた花が台風で倒れたりして残念なこともありますけど、これからも当たり前のことを当たり前に続けていきたい」とさらりと話される澤田さん。地域を大切にする心がふるさとを守り続けます。

岡屋

りゅうおうちょうせいねんだん
竜王町青年団
おかやしぶ
岡屋支部 さん

盆踊りや敬老会の主催、運動会への参画や岡屋の伝統行事である奉納冠句への協力など、年間を通じて地域に根差した取り組みを行う。

❶団員たちのもてなしで盛り上がる敬老会
❷盆踊りの手伝いをする岡屋支部の皆さん

町内に住む16歳から29歳までの若者が集う「竜王町青年団」は、町内にある五つの「会場」に分かれて、町青年大会（球技大会・駅伝大会など）や社会福祉活動などを展開。団員同士が互いに助け合い、一致団結した活動の継続は、「全国的にも珍しい存在」といわれています。

その中の「岡屋会場（山中・岡屋・小口・松が丘）」を構成する支部の一つ「岡屋支部」は、団員36人が年間を通して地区の盆踊りや敬老会など地域行事を主催するほか、そのほかの自治会活動にも積極的に参加し、区民からは、「地域の活力と発展は若者の元気な笑顔や働きにかかっています」と信頼と期待を集めています。

「大きい行事になると、岡屋会場のほかの仲間に声を掛け、手伝いに来てもらってます」と、支部を越えた協力の強みを話されるのは、平成25年度の支部長を務められる今井亮（いまいりょう）さん。夜遅くまで活動することもあるそうですが、「みんな地元が大好きなんです」と、支部の皆さんの岡屋に対する思いは強く、地域の役割をしっかりと担うことで、一層なくてはならない存在となっているようです。

「先輩方の積み重ねがあり今があります」と皆さんが口をそろえられるとおり、地域に根差した取り組みは、先輩から後輩へと着実に受け継がれ、支部の精神や伝統は守り継がれています。

東出

もりもと　まさとし
森本 真敏 さん

デフ・ハンマー投げ選手として、活躍する一方で、今日までの自らの体験をもとに講演活動を通して、地域の社会教育活動への積極的な支援を行う。

地元住民とのふれあいも大切に、子どもたちと一緒にラジオ体操に参加（東出）

ハンマー投げ選手である森本さんは、世界ろう記録の保持者で、世界ろう者陸上競技選手権大会では2連覇を成し遂げられている一流アスリート。世界を舞台に活躍されるその姿は、多くの人に大きな感動と希望を与えています。

そんな数多くの功績を残されている森本さんは、「もともと、『耳が聞こえない』ということについて話す機会をいただいたことがきっかけで、スポーツを通して学んだことを伝えるようになりました」と話されるとおり、これまでのご自身の体験をもとに全国の福祉施設や学校などで講演を行い、夢や希望を持ち、諦めないことの大切さを伝えられています。

特に「生まれ育った竜王町では、本当にたくさんの人に支えてもらったので」と、まちの未来を担う子どもたちに夢を叶える強さを身に付けてもらいたいと、地元東出や町内の小・中学校での講演を積極的に引き受けておられます。

いつも笑顔を忘れず、たゆまぬ努力を続けておられる森本さんの次の目標は、2017年のデフリンピック。「今回は2番だったので、次は1番が取れるようにしていきたいと思います」と語られる森本さんの力強い眼差しは、すでに3年後を見据えておられます。

森本さんのその歩みは、地域の子どもたちや障がいのある人たちにとっての目標となり、道しるべにもなっています。